

公立中高一貫校と私立中の「適性検査」から学ぶ、 新たな世の中と大学入試で 問われる力



変化の時代を生き抜く力が求められる今、
大学入試や教育制度が変わり、中学入試も多様化しています。
知識の習得だけでなく、正解が1つに定まらない問いに向き合い、
自ら考え最適解を導く力が重視され、従来の学力観も大きく変わりつつあります。
こうした力を測る入試として注目されるのが「適性検査」です。
今回は適性検査型入試が浸透した背景や、
各校の特色ある取り組み、求められる力について取材を行いました。



石坂康倫 先生

1976年に東京学芸大学数学科専攻を卒業する。石坂教育研究オフィス代表、首都圏模試センター教育研究所フェロー、日本先進教育研究ラボ主任研究員、FCE教育アドバイザー・Find! アクティブラーナー研修顧問、日本アスペン研究所哲学ジュニアセミナーモデレーター、渋谷区立原宿外苑中学校学校運営協議会委員、東京学芸大学教師力養成特別講座講師、元東京都立桜修館中等教育学校校長、元東京都立日比谷高等学校統括校長、元東洋大学京北中学高等学校統括校長。現在は、石坂教育研究オフィスにて教育に関する研究をしながら、学校教育関係事業に幅広く従事している。

学力試験では見抜けない力を重視 「適性検査」が導入された背景とは

東京都立中高一貫校の適性検査は、 設立当初は各校オリジナル問題が中心だった

適性検査型入試が初めて導入されたのは、公立中高一貫校でした。公立という性質上、「学力試験による選抜を行わない」という原則があったため、当初は抽選による入学決定の案も検討されていました。しかし、多様な個性をもつ子どもたちを受け入れ、育成するには、従来型の学力試験とは異なる形で思考力や判断力を評価する方法が有効だと判断されました。そのような経緯から導入されたのが「適性検査」です。適性検査型入試の導入にあたっては、私学協会と教育委員会の間で何度も協議が重ねられたといいます。この背景について、東京都立桜修館中等教育学校の立ち上げに携わった元校長・石坂康倫先生にお話を伺いました。

適性検査が導入された当初のコンセプトについて教えてください。

石坂先生 知識そのものを問うのではなく、小学生がそれまでの経験や社会の動きなどをもとに「その場で考えて、その場で

答えを出す」という力を見るというのが、適性検査の基本的なコンセプトでした。さらに、それぞれの学校のビジョンに合わせて独自の問題を作ることも、当初の方針としてありました。

具体的に、どのような学校ごとの工夫があったのでしょうか？

石坂先生 例えば、桜修館では論理的思考力を重視していました。両国は文章力や科学的な視点を含めた言語力、白鷺は日本の伝統文化への理解、小石川は理科や算数が好きな生徒を対象にするなど、それぞれの学校の特色を反映させた問題作りをしていました。

現在の適性検査はどのように変化していますか？

石坂先生 以前は各校オリジナルの問題が中心でしたが、今では適性検査Ⅰ（文章表現）と適性検査Ⅱ（算数分野、理科分野、社会分野、）という形で共通問題が整備され、半分以上を共通問題にする学校も増えています。すべてを共通問題にする学校もあれば、一部にオリジナル問題にする学校や適性検査Ⅲを導入する学校もあり、運用はさまざまです。

正解が1つではない時代に 求められる「総合力」

適性検査型入試で評価される力は、
これからの社会で求められる力と深く結びついています。
実際の社会で必要とされる能力とは何か。
それを踏まえ、
各校の適性検査がどのような力を重視しているのか、
石坂先生に伺いました。

社会で活躍する力を育てる中高一貫教育。 そのスタートを担う適性検査型入試

適性検査型入試は、公立中高一貫校だけでなく、私立中学校にも広がりを見せています。特に2020年の大学入試改革以降、知識偏重から脱却し、思考力・判断力・表現力といった力を重視する流れが強まり、私立中でも「適性検査型入試」を導入する学校が増えてきました。

今の子どもたちが大人になるころ、社会はもっと不確実で、さまざまな場面で「正解が1つに定まらない」状況が増えていくでしょう。そうした社会をより良く生き抜く力を育てるために、大学教育や入試制度が変わり、それに伴って学習指導要領も見直されています。そして中学入試もまた、その流れの中にあることがわかります。

適性検査の出題形式や、そこで問われる力は、大学入試の変化とも深くつながっているように感じます。公立中高一貫校が、大学入試の方向性を先取りしていたということでしょうか？

石坂先生 はい、まさにその通りです。桜修館においても、単に進学率を上げるだけでなく、進学指導重点校と肩を並べる、あるいはそれ以上の成果を出すことが期待されていました。実際、桜修館の卒業生の約半数が国公立大学に合格しています。なぜそれが実現できているのかというと、同校が中学入試の段階から重視している「論理的思考力」や「表現力」を、入学後の授業でも徹底的に育成しているからだと思います。国語や数学の授業では論理的思考の養成に力を入れ、5,000字程度の論文執筆や英語による要約といった課題にも取り組んでいます。このような地道な訓練を通して、大学入試はもちろん、その先の社会でも通用する力を着実に育んでいるのです。

今後の社会において、子どもたちに本当に求められる力とは何でしょうか？

石坂先生 これからの時代に必要なのは、「創造力」と「行動力」だと考えています。つまり、単に知識を持っているだけでなく、それらを組み合わせて新しい価値を生み出していく力。そして、その構想を描くだけで終わらせず、自ら実現させていく力です。これは、自分のためだけでなく、社会をさらに良くしていくという視点とも深く結びついています。

文系に進む場合も、理系に進む場合も、読解力や表現力、分析力はこれまで以上に重要になります。従来のように「文系」「理系」とはっきり区別するのではなく、今後はその境界が曖昧になり、むしろ両者が重なり合う部分が増えていくでしょう。適性検査型入試が重視しているのも、まさにそうした総合的な力です。

石坂先生のお話からは、これまでの「正解が1つであることを求める」学力観では不十分であることが伝わってきました。これからの時代に求められるのは、正解のない問いに向き合い、自分の考えを深めて構築していく力です。そして、そのような学びこそが、将来の社会で必ず役立つものになるでしょう。

COLUMN

都立中高一貫校が求める 「3つの力」と 小学生に期待する 「4つの準備」



都立中高一貫校や合格者の声をもとに、適性検査で求められる力と、事前に準備しておくことと良いことをまとめました。

<適性検査で求められる力>

- ① 読解力、思考力、判断力、表現力
- ② 教科書に載っている知識・技能の習得とその活用
- ③ 各中高で重視される力（例：あきらめずに最後までやり抜く力など）

<準備しておくこと>

- ① 新聞（特に時事問題）、伝記、歴史、サイエンス（数学・理科）、コンピュータに関する本を読む
- ② 長文を要約する練習。特に音読が効果的で、親が聞いて対話することが望ましい
- ③ 図表を読み取る練習をする
- ④ 知識・技能は学習指導要領に沿っているため、読み書きを中心に小学校の学習をしっかり行う

聞き手／首都圏模試センター・北一成、野尻幸義、文／金子菜由

光塩女子学院中の 「総合型」入試が求める 5つの力

- 思考力 (考える力)
- 論理性 (筋道を立てる力)
- 基礎力 (基礎となる知識)
- 読解力 (読み取る力)
- 表現力 (書く力)

光塩の総合型入試では、「初めて目にした問題（文章・図表）について、今まで学習した小学校レベルの基礎知識を用いて、自分の頭を使って読み解き、きちんと思考して論理的に表現する力」が評価されます。攻略法として重要なことは、「問題のなかにあるヒントを見逃さず、自分の頭で考えてみようというチャレンジする力、要は頭のしなやかさ、柔らかな思考ですね」（塚田先生）。

つまり、未知の内容に対して臨機応変にチャレンジしていく力、知識よりも、“経験知”を活かす力が試されていきます。なぜなら、その力が将来の進路選択へのアドバンテージにつながるからです。「そういったしなやかさを育む機会が、わが校にはたくさんあります。勉強面だけではなく、友人関係でも話し合いや交渉する力は大事だと思いますし、社会にでてからも同様です。将来につながる大事な力を身につけてほしいですね」（塚田先生）

ては記述問題も多く大変ですが、加点方式で答案の良いところを探すという作業は、採点する人間にとっても刺激を受ける楽しい時間です。

— 総合（100点）に加えて、算数基礎（50点）、国語基礎（50点）の3科目で行われる入試方法も特徴的です。

山本先生 算数、国語については、基本的な力があれば入学後に育てられると思っています。小6の段階でそこまで難しい算数の問題が解けなくても、最低限の算数力があれば十分です。

塚田先生 苦しんで入試を突破してくるっていうわけではなく、この入試問題を解いてよかった！ という感覚で入学してくれるとうれしいですね。「この問題を解いていて楽しい」って思う子たちに入学してほしい、それがこの入試に関わる先生たち全員の気持ちだと思います。



2025 年光塩女子学院中等科【2/1 午前】「総合」入試問題

問 6 下線部 6「新しい言いまわしを身につければつけるほど、世界が広がっていきます。」の部分を読んだ光子さんは、この本の前の章の文中で「ケシゴムの悲しみ」という新鮮なフレーズを目にし、面白い表現だなあと感じたことを思い出しました。

(2) 光子さんは「ケシゴムの悲しみ」という新鮮なフレーズについて思いめぐらしています。「ケシゴム」は、実際には「悲しい」という感情を持っていないはずなのに、「ケシゴムの悲しみ」という新しいことばのつながりによって、新しい世界が創り出されたように感じて、光子さんはワクワクしました。「ケシゴムの悲しみ」ということばのつながりからどのような情景が思い浮かぶか、分かりやすく説明してください。

「その場で考える力」を育むことは、 大学受験でも強みとなる重要な学び

— 「総合型」入試を2月1日午前に実施されていますが、いわゆる4教科型で合格を目指す生徒さんとは違った個性を求めたいという意図があるのでしょうか？

山本先生 総合型を導入する前は、地道にコツコツ勉強するタイプの生徒が主流だったと思います。教科型入試では多くの知識が求められますし、それも当然必要な力です。でも総合型を導入して、「その場で考える力」「瞬発力」「発言力」などに長けた生徒が増えてきました。「アイデアと伸びしろ」のある子をとりたい、そんな思いでこの入試を始めましたが、確実に成果が出ていると思います。当初はもっと少人数での募集でしたが、教科型入試の生徒と、総合型の生徒、違うタイプの生徒たちが入学後に刺激あって成長する姿を見て、総合型の定員を増やそうという方向になっていきました。

— 「その場で考える力」はいまの大学入試でも重視されていますし、変化する世の中に対応する上で、まさに求められる力になっています。

山本先生 ふり返ってみると、総合型入試を始めた時は、まだ国公立大学の後期日程があった頃でした。この総合型入試のアイデアは、その時の受験生たちと大学入試に取り組む過程からでてきたものだったんです。たとえば大学入試では、その場で初めて目にするような実験問題がでることもあります。でもそれは内容を読んで、その場で表現していけば解くことができる問題です。そんな課題に取り組んでいくうちに、急激に力を伸ばしていく生徒たちが大勢いたんです。その経験から、中学受験の段階で、そもそもそういう問題を楽しめる人を見つけていくのはどうか、という思いがでてきたんです。

— そういった力をもった生徒さんたちは、現在の大学入試、その先の社会でも大きな活躍ができそうです。

塚田先生 大学入学後もその先も、学び続ける力のある生徒たちをたくさん見てきています。卒業生たちが大学での学びを、「新鮮というよりも、これは光塩で学んだことそのままだ」って言うてくれるのを聞くと、6年間で養えた力を実感できます。そして彼女たちこそがこの学校の本当の財産だだと思いますね。

— 作問についても伺わせてください。この入試は教科横断型という意味で、いわゆる「適性検査型」の入試に近いように思いますが、いかがでしょうか？

塚田先生 もちろん教科横断型という意味では「適性検査型」との共通項はあると思います。でも光塩の「総合型」入試は、いわゆる「〇〇型」のように型にはめる必要はないと思っていますし、都立校のどこかを意識して作問するというのもまったくありません。

— 確かに先生方の個性がそのまま活かされたような、オリジナリティにあふれた問題ばかりです。

塚田先生 だからこそ、見ていてワクワクする答案にも出会えるのだと思います。そういう答案からは、発想がもしろいのはもちろん、表現したい、伝えたいという思いが伝わってくるんです。文章に力がある答案は、読んでいてワクワクしますね。

— 作問、採点はチームで行われているのでしょうか？

塚田先生 わが校はもともと共同担任制をしいていて、1学年につき6～7人の教員で学年全体をサポートしています。その体制が教科横断型の作問をするにあたって役立っているのだと思います。問題作成に限らず、教員同士が協力することには昔から慣れていますから。

山本先生 「小学6年生にいま考えてほしいことはどんなことか」「こういうことを聞いたら、受験生が楽しめるんじゃないか？」などのアイデアを、チームでおしゃべりしているうちに完成に近づいていくという感じです。採点につ

「この入試問題を解いていて楽しい」、
そんな感覚で受験してもらえたら
うれしいです

塚田先生



光塩女子学院中等科の 「総合型入試」が求める力とは？

— 教務主任・塚田聡子先生と進路指導主任・山本明先生に聞く！

1931年に光塩高等女学校として創設された光塩女子学院。総合型入試の先駆けとも言える同校の「総合型入試」は、2010年入試から選択制で実施、その後2016年に独立した形で始まりました。

本格的に取り組み始めてから、間もなく10年。その手ごたえを、教務主任の塚田聡子先生（社会科／探究チーム）と進路指導主任の山本明先生（理科／物理）に聞きました。



写真向かって右から、教務部長・国語科の塚田聡子先生、進路担当の理科・山本明先生

2科・4科の学びこそが、 “答えのない問い”に立ち向かう力の 土台となる

適性検査の作問においては、「各校が求める力をどのように問題に落とし込むか」が大きな課題になります。というのも、教科ごとの視点や作問方法をすべて統合し、適性検査全体を設計できる人は非常に少ないからです。そのようななか、南多摩中等教育学校での実績が評価され、八王子実践中学校に招かれたのが田母神先生です。

——「適性検査の作問において、どのような点を意識して取り組まれているのでしょうか？」

田母神先生 まず大切にしているのは、全体を俯瞰し、その根底にある「コンセプト」をしっかりと理解したうえで、教科ごとの作問に取り組むことです。特に「どんな力を見たいのか」を明確にすることを重視しています。

適性検査では、唯一の「正解」が存在するとは限りません。答えが1つに定まらないからこそ、「自分で考え、自分の言葉で表現する力」が求められるのです。そのため、文章やグラフなど、適した素材を選ぶ作業には、かなりの時間と手間がかかります。

私自身、さまざまな学校の適性検査問題を収集し、分析しています。また、素材集めは私一人ではなく、本校の教員全員で協力して取り組んでいます。

——「自分で考える力」というお話もありましたが、適性検査を解くうえで必要となる、論理的に読み取る力や表現力は、どのように育まれるのでしょうか？」

田母神先生 とても難しい問いですが、ひとつ言えるのは、やはり2科・4科の学力がしっかりある子のほうが、対応が早いということです。あらゆる教科に共通するのは、「物事の論理性」です。つまり、2科・4科を通して多角的に学習し、そのつながりを実感する経験を重ねることで、自然と論理性が高まっていきます。

たとえば生物の動きも、感覚や習慣ではなく、すべて論理に基づいています。そうした仕組みを理解できる子は、知識を結びつける力も強いですね。同時に、そこをおろそかにせず積み上げてきた子は、結果的に適性検査でも力を発揮します。

ただ、普段の生活だけでは論理的な力はなかなか身につけません。重要なのは、保護者が子どもにどう関わるかということ。たとえばテレビのニュースやクイズと一緒に見ながら、「これはなぜだろう？」と問いかけたり、わかりやすく説明したりする。保護者自身の論理的なアプローチが、子どもの理解力に直結するのです。

また、塾に通っている子どもたちは、先生とのやりとりや仲間との対話を通じて、多くの「言葉のキャッチボール」を経験しています。そうしたなかで表現力や思考力も鍛えられていきます。

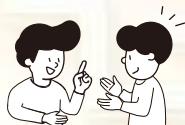
実は、最初から適性検査型入試だけに絞って対策している子どもは、その後、難関大学に進学するケースがあまり多くありません。中学進学後も学び続ける力を育むには、小6の前半までは2科・4科の基礎をしっかりと固めることが大切です。基礎が不十分なままでは、入学後に苦労することになります。

答案から見られる思考の深さ “自ら考え、乗り越える力”が未来を切り拓く

—— 実際の小学生の答案からは、どのようなことを感じますか？」

田母神先生 設問に正面から向き合っている子どもは、問題文を正確に読み取り、問われている内容をきちんと理解できるため、自然と高得点につながります。

なかには、大人でも思いつかないような深い考察をする子もいて、驚かされることがあります。そうした「想定外の良い回答」をどう評価するか、あるいはそれを見越して設問を設計することも、作問・採点側に求められていると感じています。



自分で考え、答えを導き出す力は、 中高での学びの土台になり、 大学入試にも直結します

田母神武浩 先生



田母神武浩 先生

東京都にて36年間教職に従事し、令和3年3月に都立高校を退職。教員人生のスタートは市立中学校での4年間で、その後32年間にわたり都立高校に勤務。南多摩中等教育学校には開校7年目から9年目まで在籍し、令和3年4月より八王子実践中学高等学校に勤務し、現在は同校の適性検査型入試の作問や教育内容の充実に尽力している。

八王子実践中の 適性検査入試が求める力とは？

—— 適性検査型入試ご担当・田母神武浩先生に聞く！

八王子実践中学校では、2019年度分従来の教科型入試を廃止し、「プレゼンテーション入試」と「適性検査入試」を導入。

適性検査は東京都立南多摩中等教育学校の出題傾向に準拠し、得点率や採点基準も同等です。今回は、かつて南多摩中等教育学校に在籍し、現在は八王子実践中学校で適性検査入試の作問を担当する

田母神武浩先生（入試広報室）にインタビュー。

作問における工夫や、同校が求める資質についてお話を伺いました。

—— 適性検査型入試と大学入試とのつながりについては、 どうお考えですか？」

田母神先生 適性検査では、自分で考え、答えを導き出す力が求められます。この力は、中学・高校での学びの土台となり、やがて大学入試にも直結していきます。




勉強が順調なときは誰でも前向きに取り組めますが、壁にぶつかったときにどう対応するかが重要です。適性検査を突破する生徒には、「乗り越える力」や粘り強さが備わっていることが多く、結果的に大学進学につながりやすい傾向があります。

大学入試で成果を上げる生徒には、自ら目標を立て、主体的に行動できるという共通点があります。そうした力を育てる第一歩として、適性検査型入試には大きな意義があると感じています。



八王子実践中学校 2023(令和5)年度「適性検査Ⅱ」③より一部抜粋

実験2の結果

使った液体	消毒液	食酢（お酢）	植物油（サラダ油）
実験の様子			
氷の様子	沈んだ	浮かんた	沈んだ
液体の体積	200cm ³	200cm ³	200cm ³
液体の重さ	160g	198g	179g

〔問題2〕

- 表1を参考にして、氷が浮かんた食酢の重さと氷の重さ、氷が沈んだ消毒液の重さと氷の重さから、氷が浮くときと沈むときの液体の重さについて説明しなさい。
- 植物油に氷を入れたとき、氷がゆっくり沈んだのはなぜですか。その理由を表1と会話文を参考に説明しなさい。
- AさんとBさんは、一方の液体を先にビーカーに入れておき、そのあともう一方の液体を同じビーカーに入れる実験3をやろうとしています。水と植物油、消毒液と植物油のどちらかの組み合わせで実験3をしたとき、実験1と実験2を参考にして、実験3の結果を理由を示して予想しなさい。

聞き手／首都圏模試センター・北一成、文／金子葉由

様々な意見を統合させつつ理解を深め、 自分の考え方へと昇華して表現できる力を

適性検査型入試を行う私学の先駆けで 最大の受験者数を集める安田学園の学びとは

— かなり早い段階から、公立中高一貫校を志望される方も受けられる適性検査型入試を実施し、先進コースでの学びに結びつけ、学校の活性化や入試のレベルアップにつなげてこられたと感じています。

土屋先生 適性検査型入試は15年以上実施しており、受験者数も4科目入試の半数に満たないまでも、募集の柱の一つとなっています。

— 適性検査型入試の作問コンセプトは先進コースの探究型の学びなど学習スタイルにも密接に繋がっていますか？

工藤先生 「思考力」をしっかりと問うていることが見える出題になっており、確実に繋がっていると思います。入学後は、課題を見つけ挑戦する、探究的な学習に力を入れており、その他の教科の授業でも多くの教員が探究的な学びになることを目指しています。知識をインプットする学習もちろんありますが、複数の資料を読み合わせてプレゼンなどに活かす、図書館などでさまざまな資料に当たり、それをもとに考察を行う授業は豊富に実施しています。

作問時に気をつけていることや 受験生たちに見られる変化について

— 適性検査型入試の作問は各教科の先生が関わられていると思いますが、使用される素材について教えてください。

工藤先生 本校の適性検査型入試では、基本的に2つの文章

が出題されます。文章に書かれている内容をしっかりと理解した上で、複数の意見を総合して自分の考えに繋げて表現してほしいという思いがあります。そのため、4科目型入試と比べると、文章のレベルは理解しやすいものとなっています。文章の内容を自分の実体験と照らし合わせて繋げて解答するというのは、4科目入試では測ることができない力です。

— 作文がメインの適性検査型入試の採点は大変な部分もあると思いますが、解答に触れていく中で発見されたことなどはありますか？

土屋先生 ありがたいことに多くの方が受けてくださっているのですが、4科とはチームを分け、何人もの教員で時間をかけて採点しています。採点をする際には、客観的な物差しでの明確な採点基準もありますが、目線合わせも大切にしています。

工藤先生 解答は小学生ならではの経験に基づいた内容が多いですし、そうあるべきだとも思っています。

私がこの入試に関わり出してから5年ほど経ちますが、最初の頃は解答用紙を埋められない受験生が見受けられました。しかしこの数年は書ける受験生も増え、論の立て方などもしっかりと準備されてきているように感じます。

適性検査型入試を経た在校生の様子や 進学実績の変化とは

— 適性検査型入試を通じて、伸びしろのある生徒を迎えたいとお考えの学校が多いように思います。多くの卒業生を輩出しているご経験から先生方が感じられている手応えは？

本校の探究型の学びとマッチし、 学力が飛躍的に伸びる 生徒が増えています

塚田先生

安田学園中学校の 適正検査型入試が求める力とは

— 適性検査型入試作問担当・工藤夏花先生と
入試広報部長・土屋道明先生に聞く！！

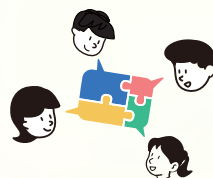
1923年、実業界の偉人・安田善次郎翁によって設立された安田学園。近隣には2006年に中高一貫校に改めた都立両国高等学校・附属中学校があり、都内の私学でもいち早く適性検査型入試を始め、多くの受験生を集めています。

2025年度の適性検査型入試において、2月1日午前は526名、2日午前は390名という出願者があり、都内最大の受験者数を誇ります。

適性検査型入試作問担当・工藤夏花先生と
入試広報部長・土屋道明先生に同入試の作問や求められる力、入学後の学校生活や進路について伺いました。



写真向かって右から、適性検査型入試作問担当で国語科教諭の工藤夏花先生、入試広報部長で英語科の土屋道明先生



工藤先生 国語の授業で作文を書くとき、適性検査型入試を経てきた生徒の文章はとても整っていてやはり上手です。そのため4科目入試で入学した生徒たちは、思考力があり書く力を持っている彼らの文章から学ぶことが多々あります。しかし4科目入試で入った生徒たちは知識のインプットや型を覚えることが上手だったり、条件を守った記述ができたりと、1つのクラスの中で異なる部分に強みを持つ生徒たち影響し合いながら育っています。

土屋先生 適性検査型入試を経た生徒たちの入学後の様子を見ると、本校の探究的な学びにとてもフィットしています。実際にそうした学びが好きな生徒が多いと感じています。例えば生物クラブで活躍し、世界大会に出場した生徒も遡ってみると適正検査型入試を経ており、力を発揮しやすい環境なのだと思います。

現在とても盛んになっている総合型選抜を利用する生徒も増え、今春の卒業生で東京大学や東京科学大学、大阪大学、東北大学への進学者の多くは適性検査型入試で入学した生徒たちです。一般入試大学に挑戦する生徒も含めて小6の段階であれだけの文章量を書く訓練をしてきている子たちなの



2024 年度安田学園中学校【2/1 午前】第1回「適性検査Ⅰ」より抜粋

問題3 あなたは「世間」が与える影響について、どのように考えますか。あなたの考えを四百字以上四百四十文字以内で書きなさい。ただし、次の〈条件〉と「きまり」にしたがうこと。

〈条件〉
①「世間」とは何か、文章1・文章2のいずれから読み取り、それをはっきりと示すこと。
②あなたの生きる「世間」を具体的に挙げ、その世間が自身に与えた影響について書くこと。
③適切に段落を分けて書くこと。

「きまり」
○題名は書きません。
○最初の行から書き始めます。
○「や、や」などもそれぞれ字数に数えます。
○段落をかえたときの残りのマス目は、字数として数えます。
○最後の段落の残りのマス目は、字数として数えません。
○その他、原稿用紙の使い方にのっとってください。